ヘボンの生涯と日本語

望月洋子

新潮選書

旅券の申請に行ってヘボン式ローマ字表を渡され、ヘボンを思い出す人は多いと思うが、彼の編んだ辞書や聖書の日本語訳のことは案外知られていない。ニューヨークでの豊かな生活を捨てて来日した安政6年から33年間、彼は近代日本の黎明を目の当たりにしつつ、医療奉仕を通じて多くの人々と交わり、異文化間に言葉で橋を架けた。国際交流の礎を築き、言葉とは心なのだと身をもって示した彼の仕事を、今一度見直してほしい。　著者

ヘボンの生涯と日本語 〈新潮選書〉

© Yôko Mochizuki. Printed in Japan, 1987

昭和六十二年四月十五日 印刷
昭和六十二年四月二十日 発行
定価 八三〇円
著者 望月洋子
発行者 佐藤亮一
印刷 東洋印刷株式会社
製本 植木製本株式会社
発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号 一六二
電話 編集部(03)二六六—五四一一
業務部(03)二六六—五一一一
振替東京四—八〇八番

(乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

ISBN4-10-600329-5 C0323

)生涯と日本語

望月洋子

新潮選書

ヘボンの生涯と日本語◆もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

1
維新前夜の日本へ……9
「生麦事件」を診た人　一八五九年、ヘボン神奈川に上陸
地球の反対側へ　ヘボンの生い立ち　モリソン号事件と日本開国　ニューヨークからの脱出

2
洋医ヘボン……37
キリシタン禁教令の下で　不如意の日々　日本語の複雑さ
日本人教師ヤゴロウ　一点の目薬から　医療の現場で
ヘボン以前の日本語研究　向学心に燃える日本人　遣米使節の帰国

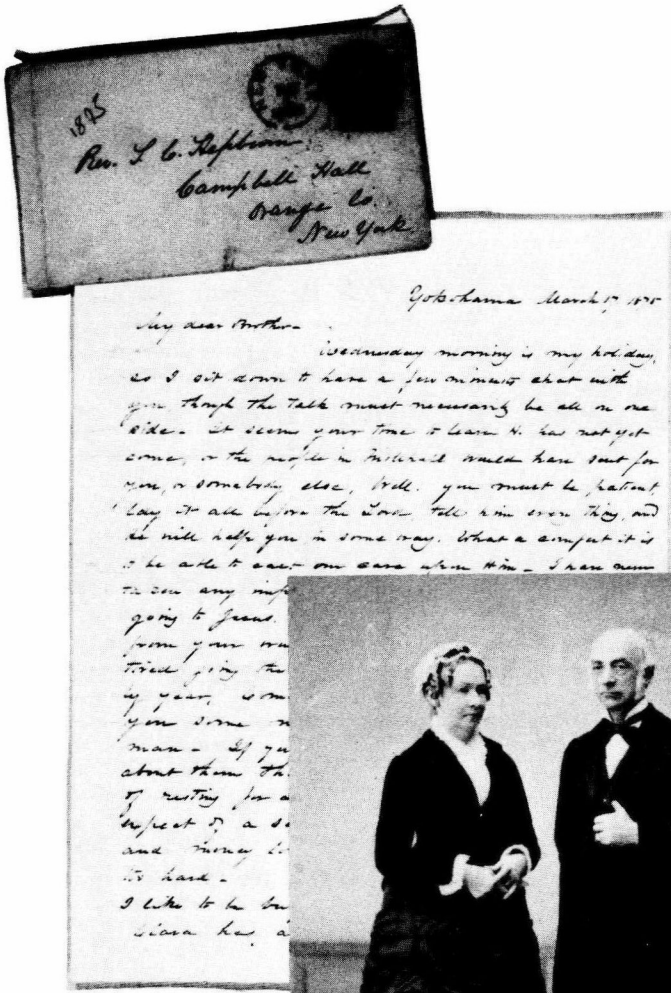
3
攘夷の時代……83
ヘボンの語彙ノート　殺気満々　帝(ミカド)と大君(タイクン)　妻と子と
大村益次郎ら入門　ヘボン夫人の塾　横浜アカデミー
薩英戦争と下関事変　谷戸橋畔三十九番　岸田吟香

4
和英語林集成を読む……125
多難の道　上海へ　ヘボン辞書の特色　カナ遣いと漢字
漢語と外来語　品詞分類と語釈　普通辞書としての工夫
待望の辞書、しかし……　言葉の変遷とヘボン式ローマ字

5
聖書を日本語に……167
漢文聖書を読む　口語文は可能か　栄光（さかえ）・愛・ロゴス
共同訳を呼びかける　ヤソかイエスか　フルベッキとブラウン　日本人助手とスパイ　はじめに言葉あり

6
長すぎた旅……203
美国名医平文先生　禁制の高札いまだ撤去されず　近代化の波の中で　ヘボン夫妻をめぐる人々　讃美歌の誕生
にぎやかな日々の陰で　傷心のヘボン　旧約聖書完成
明治学院と『聖書辞典』　ヘボン館炎上

年表・参考文献　241
あとがき　246



ヘボンの手紙。一八七五年、弟宛。

金婚式のヘボン夫妻。一八九〇年。

（横浜開港資料館蔵　高谷道男氏寄贈）

ヘボンの生涯と日本語

1　維新前夜の日本へ

「生麦事件」を診た人

一八六二年九月十四日（文久二年八月二十一日）、武蔵国橘樹郡の街道で、外国人殺傷事件がおこった。かなり詳しく残されている当事者たちの証言を要約すると、次のようになる。

昼ごろ四人のイギリス人が横浜を出発して、東海道を川崎方面へ向った。ハード商会横浜駐在員ウッドソープ・クラーク、その友人ウィリアム・マーシャル、マーシャルの従妹で香港から遊びに来ていた二十二歳のミセス・ボロディール、上海の商人リチャードソンは、馬で六郷川まで行って川崎大師を見物しようと出かけたのであった。

生麦村にさしかかると、大名行列の露払いらしい数人の侍とすれちがった。彼らが、道の脇へ寄れと身ぶりで示したので、四人は端に寄って馬を進めたのだが、やがて武装した何百人もの侍が街道幅一ぱいになってあらわれると、四騎は行列内にたぐりこまれた状態になった。

うろたえるうち、大名の乗物らしい立派な駕籠が迫って来た。駕籠脇の大男がいきなり刀を抜いて叫んだと思うと、先頭のリチャードソンが袈裟がけに深々と一太刀浴びせられた。マーシャルもクラークも夢中で馬首をめぐらし、女性を先に立てて、もと来た方向へ逃げたが、侍たちが追いす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

がって来て、肩や背に斬りつけた。男二人は神奈川青木村まで駆けて、アメリカ領事館のある本覚寺にとびこんだ。ボロディールは半狂乱でこれに気付かず、さらに横浜まで突っ走った。マーシャルは気を失って落馬し、警護の役人に寺内へかつぎこまれた。

本覚寺が騒然としたのは言うまでもない。奉行所へ、運上所へと、早馬がとび、使いが八方へ駆け出して行く。領事は、沖の軍艦に変事出来を知らせるため、最も高い松の梢に星条旗を逆さに掲げ、合図の空砲をうたせた。

本覚寺から次々と役人が走り出すのを見て、近くの田畠で働いていた里人も、家へ駆戻った。役人の一人は、坂道をかけおり、畠を横切って、成仏寺に住むアメリカ人の医者を呼びに走る。やがて成仏寺近辺の人々は、平素ものしずかなその医師が、馬腹を蹴って飛び出してゆく姿を見て、

「ヘボン先生が、怪我人の手当てに呼ばれたのだ」

と噂した。

ヘボンは、この日午前中いっぱいを机にむかってすごし、同じ寺に住む親友S・R・ブラウン牧師らと歓談しているところを、領事の急報で呼出されたのであった。本覚寺へ駆けつけると、二人の男が血みどろのまま寝かされていた。一人は肩を骨に達するまで、他方は背と脇を数ケ所斬られていて、出血がひどい。

ヘボンが止血鉗子で出血をとめ、傷口を縫合している間に、イギリス領事H・ヴァイス、公使代理E・J・ニールらが到着、英艦セント号から武装した水兵もランチで繰り出した。英公使R・オルコックは休暇で帰国中であったが、フランス公使D・ベルクールが六騎の護衛兵を急派、自らも駆けつける。

帰って来ないリチャードソンを探しに、人々は残暑のきびしい東海道へ、次々と走り出て行く。

噂を聞いた各国の商人たちも、コルトやアダムズの拳銃を手に、義勇軍を結成するのだと色めき立っていた。結局、二十八歳の英公使館付書記官W・ウィリスが、生麦村の路傍にリチャードソンの死体を発見、遺体は全身に傷を負い、咽喉にとどめを刺されていた。

英海軍陸戦隊が本覚寺の周辺に並び、英米仏蘭露、駐留五ケ国の外交官と居留地の商人との間で議論が沸騰した。ヴァイスやジャーディン・マゼソン商会のガワーらを中心に「大名行列を追討すべきだ」との興奮した声が一斉にあがったが、ニールが鎮撫に努め、仏公使がその慎重策に賛成、外交交渉に一任という線を取りきめた時には、もう空が白みかけていた。そのころ、港にはイギリスの旗艦ユリアラス号が砲艦を従えて入ってくるのが見られた。

行列の主が薩摩藩主の後見島津久光だと聞くに及んで、ヘボンは、事態の容易ならぬことを悟らずにいられなかった。薩摩の実権を握る久光は、公武合体運動の中心人物として、外国人の間でも注目を集めていた。彼がこの五月に入京して国難打開に当ると称し、京の寺田屋事変をおさえたり、六月に勅使を奉じて江戸へ向ったりしたことは、ヘボンたちにも聞えている。

幕府は勅使の帰洛に際し、外国人の通行を禁じ、外出を注意する布告を発していたが、その日付けは八月二十二日となっており、前日に神奈川を通る島津に関しては、特に明確な指示は出していなかった。むろんそれでも「シマヅ」が通るという噂は拡まっていて、後日クラークが述懐したところによると、「今日のピクニックは中止したほうがいい」と四人に忠告した者もあった。しかし四人は「幕府の認めた遊歩日に、条約で定めた遊歩範囲を歩くのだから、不都合はあるまい」と判断して出発したのだった。

この薩摩藩の一行には、勅使を擁しての往路でも、ちょうど同じあたりで騎馬の外国人に「行列先を汚された」という不快な記憶があった。江戸表で幕政改革を進言し、公武合体を説いたのに対

し、幕府の重臣らは煮えきらぬ態度を示し、また、京都で長州藩が攘夷決行と条約破棄を叫ぶという挙に出たため、これに張り合うべく急ぎ帰洛せねばならず、じりじりと照りつける炎天下を、薩摩武士たちは苛立ち、逸りながら急いでいたのである。

当時十八歳の鉄砲組徒士久木村利久は、供頭当番奈良原喜左衛門が抜刀するのを目にし、供頭非番海江田信義が「無礼者」と叫ぶのを聞いて、反射的に斬ってしまったと、のちに告白している。彼はお咎めを覚悟していたところ、主君からお褒めにあずかり、金子を賜った。

神奈川奉行は、事件を江戸へ急報する一方、若菜三男三郎に命じ、行列を追いかけて、宿場にとどまらせるよう沙汰した。事件のあと、薩摩藩は神奈川泊りの予定を保土ケ谷宿に変更、誠忠組の快挙とばかり、昂揚した海江田・奈良原らは、外国人とさらに一戦を交えることも辞さない勢いであった。

史上「生麦事件」とよばれるこの出来事の顚末は、当時来日したばかりの十九歳の英公使付書記官アーネスト・サトウも、回顧録『一外交官の見た明治維新』に詳しく記している。彼は、外交官として最初に遭遇したこの「野蛮きわまる殺戮」と、以後も報復・賠償問題などにかかわって、長くつきあうことになる。

サトウは一八六二年九月七日横浜に上陸したのだが、翌日すぐ成仏寺を訪れて、日本語彙を蒐集して「辞書（レキシコン）」の編纂に熱中しているヘボンと、会話書を執筆中のブラウンとに会い、以来、寺に通ってブラウンから日本語を習っていた。

事件当日、救急の知らせにヘボンを呼びに走ったのは、警護のため米領事館に詰めていた神奈川奉行所の定役人であった。奉行所や運上所で、同僚たちがつねづねヘボンのことを温厚な名医であると評定するのを聞いていたので、彼は不測の事件に直面して、すぐヘボンの顔を思い浮かべたの

であろう。英公使館には英人医師ジェンキンズがいたし、事実遅れて馳せ参じているのだが、役人たちがまず「ヘボン先生を」と言いあわせたうらには、ヘボンがすでに在日外国人の中で群を抜いて人望を得ていたこと、医者として敬愛されていたことが考えられる。

神奈川運上所に付属する役人官舎内で「西洋の君子」という仇名がヘボンにつけられていたことを、官舎に住込んでいた翻訳方の山内六三郎（提雲、のちの鹿児島県知事）などが語っている。駐英大使となった伯爵林董（ただす）が、後年明治学院で行った講演や、また思い出を綴った手紙にも、その間の様子はうかがえる。

運上所詰めの役人が集って、話が港の外人居住者の事に及ぶと、「君子とはヘボンのような人のことだ」と博士が引合いに出された。当時外国人は一般に侵略者と考えられていたのに、ヘボン博士がこうした名称で呼ばれたのは、すでに彼の接した日本人の尊敬を得ていた証とすることができる。（プリンストン大学蔵、林からグリフィス宛）

一八五九年、ヘボン神奈川に上陸

生麦事件が起った当時、ヘボンは四十七歳、来日後二年と十一ケ月を経ていた。ヘボンが到着した安政六年（一八五九）は、井伊大老による安政の大獄で、国中が粛清にふるえ上っている最中だった。ヘボン入港の日にも、国事犯が抜身槍の警吏に囲まれて、東海道を護送されていたのである。上陸の六日前には橋本左内が江戸で獄死、頼三樹三郎も小塚原で処刑（安政六・十・七）されている。さらに二十日後には吉田松陰が処刑された。

一方、江戸で死者一万人を出したという安政の大地震（マグニチュード六・九）以後、安政年間は異常なほど地震が多く、ヘボンも月に二回平均の地震に驚き、四十五秒揺れたなどと記している。

その上コレラが猖獗をきわめ、対策がわからず蔓延するにまかせるばかりである。はじめ「インド霍乱」と名付けられたこの病気は、突然発病してあっけなく死ぬので、やがて「コロリ」と呼ばれるようになる。なにかと変事が続くため、これは国ぐるみの天罰を蒙っているのだと人々はおびえるのであった。

それに加え、各地で凶作と米価騰貴のために、農民の暴動、打ちこわし、強訴が続発している。人々は動揺し、黒船渡来以後ろくなことはないと、災厄を「開国」と結びつけて考えはじめていった。学者や藩主の建白書が出たり、幕府の条約締結を批判する声がささやかれ始めたのも、この頃からである。安政年間に何百種と売出された地震図の一枚刷りのうち、とりわけ「鯰絵」が人気を集め、多色刷木版になって売れ続けたが、これも次第に政道批判の諷刺画となっていった。

天下の風雲を案じたのは、京や江戸の識者ばかりではなかった。紀州藩校講官の妻川合小梅は、安政六年の日記に「いづれようないならざる時節也。（中略）いとも〳〵はかなく恐ろしき時節とは成ぬ。長命をもいのらず只無事のみいのる也」と記し、地震・悪病・異国船の来航・内乱の兆を列挙している（『小梅日記』八月二十八日）。この頃、一揆や暴動は、一年間で二百件に及んだ。

まして、突然上からの命令で貿易港として開かれた横浜・神奈川が紛乱をきわめたのは、想像にあまる。日米間の十数回にわたる条約談判で、一旦神奈川ときめられた開港地が、東海道の宿場に近いため、紛糾の種となりかねないと気付いた幕府の懸念から、米公使ハリスの香港旅行中に、対岸の寒村横浜村とすりかえられていたことも、混乱をより増大させることになった。ハリスは違約をなじり、神奈川奉行の懇請に憤慨して、自分は横浜村には決して足を踏み入れぬ、と態度を硬化させた。

六月に着任した領事も、ハリスの意を受けて、奉行の用意した横浜領事館を拒み、神奈川青木村

の本覚寺に入ったわけで、日本側もアメリカ側も、開港事務は緒についたばかり、民間の渡航者を受入れる準備など、まだ何もできていない。

こうした事情を知らずに上陸したヘボン夫妻は、戸惑わざるを得なかった。住居を見つけるまでの苦労をヘボンが述懐している。

私が初めて日本に足を踏入れた時にはドウでござりましたか。僅か漁師百姓が居たばかりでした。（中略）私は神奈川駐劄の領事の所へ行きました。領事は開港場の頭に相談致すから二日程待ってくれと申しました。そこで毎日々々領事館に行きました。ついては自分はドコに居ってよいかというに、神奈川にある三つの寺の一つを選べということで、その一つを選んで、そこに住居したのでござります。（明治二十五・十・十五、指路教会でのヘボン講演。石本三十郎訳）

三つの寺というのがどれか今は知るよしもないが、ともかく大箱に入ったヘボンの荷物は五日めに陸揚げされた。神奈川の寺が、片端から外国人用に明け渡された気前のよさは、ハリスも驚いたほどであった。内外人の衝突を恐れた幕府の、応急処置である。

ヘボン医師、すなわちジェームズ・カーティス・ヘプバーンが、神奈川に入港したのは十月十八日（陰暦九・二十三）のことであった。ヘプバーンというスコットランド系の姓を、彼はテノールのよく響く声でヘバーンと発音していたという。当時の日本人はその発音をうまくまねられず、「ヘボン」と訛って呼んだ。呼ばれた本人は、いやがるでも訂正するでもなく、素直に受け入れ、自から「ヘボンでござります」と名乗り、時には「平文」と漢字で署名もした。写真で見ると、固く結んだ唇のあたりに強情一徹の気がただよい、時に狷介さを見せる彼の、率直で気さくな一面であろう。

ヘボン来日当時、神奈川奉行所は、出先機関として横浜村の浜に運上所を設け、外交事務と税関

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co